

---

# 花底の残夢

砂那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花底の残夢

### 【Nコード】

N8705P

### 【作者名】

砂那

### 【あらすじ】

繰り返し見る夢があった。

百花繚乱の庭園で、ひとりの少年と手を繋いで歩く夢。

それは、遠い記憶。いずれ想い出として消えていくだけだと思っていた。

両親を事故で失った領主の娘リナは、若くしてその地位を継いだ兄を助けながら、二人で懸命に領地を守って暮らしていた。いずれは兄の立場を守る為に、何処かの顔も知らない相手に嫁ぐのだろう。

けれど、雨が静かに降る町で出逢ったひとりの剣士。優しい彼に、  
どうしようもなく惹かれていく。そしてリリナを愛するもうひと  
りの男。

失われた幼い記憶に眠っていたのは、初めての、恋。  
それを取り戻した時に、リリナが愛していたのは。

## 【1】 領主の娘

太陽は昇ったばかりだった。

まだ陽に染まっていらない冷たい空気の中、ひとりの少女が聖堂で女神に祈りを捧げていた。

白い無垢なドレスに金色の長い髪をそのまま垂らし、祭壇に跪いているその少女は、このクラーリン領主の妹リリナだった。

領主の館の敷地内に建てられたその聖堂は、信仰心を表すかのようには美しい造りで、手入れも行き届いている。

この土地で信仰されているのは、大地の守護神である女神。

こうして毎日、大地の女神に感謝の祈りを捧げ、女神の加護がこの土地を満たすようにと祈るのがリリナの日課だった。ここは王都から離れた辺境の土地だったけれど、大地の恵みが豊かで人々も皆勤勉で優しい。生まれ育ったこの場所を、彼女もとても愛していた。両親を事故で失ってから、三年。

年若くして領主になった兄を少しでも支えようと、自分に出来る事は何でも協力してきたつもりだ。この土地の平穏が、ずっと長く続くようにと願って。

けれど平穏を願うリリナの心とは裏腹に、この大陸は少しずつ乱れ始めていた。

大陸には数多くの領主がいて、リリナの兄もそのひとりである。そしてその領土と領主すべてを従えるのは、この大陸の王、ジョルジュ・リスターン・アルカディン。王の下に統一されたこの大陸は平和だった。

少なくとも、五年前までは。

リリナの兄と同じく、今の王もまた年若くしてその地位を継いでいる。

前王の死は、あまりにも突然だった。

その死因は流行病だと伝えられていた。その病によって王だけで

はなく、正妃、そして側妃とその生まれたばかりの子供、さらには王の妹姫まで命を落としたのである。王位継承者である現在の王が無事だったのが、不幸中の幸いだった。まだ存命だった父が悲しげに呟いたのを、当時十二歳だったリリナは今でも覚えていてる。

だが突然に位を継いだ、まだ若い王を侮ったのか。自らの領土を広げようと、少しでも豊かな土地を我が物にしようと、不穏な動きをする領主もいるという。

若いという事は、経験の浅い事は罪なのだろうか。それとも人の欲望は際限がないのだろうか。

リリナの住むこの領地もまた、自然が豊かであるという事、そして領主が若い青年という事もあり、以前のように平穏ではなくなっていた。

愛するこの土地の平和が乱されないように。リリナは祈る。

兄はこの領地を守ろうと必死になっている。

今はまだ、直接王に逆らおうとしている者はいない。

けれどこのまま不穏な噂が流れていても王が動かずにいれば、どうなるかわからない。それほど危険な状態になっていた。

だからこの領土につけている隙はないのだと示す為に資金を貯め、兵士を雇い、そして王都へも頻繁に出掛けていた。そして近々、親交を結んでいる領主の娘を花嫁として迎え、親類関係を結ぶ予定でもあった。そしてそれは領主の妹である自分にとっても、この土地を守る為に出来る有効な手段だった。

すなわちこの領土にとって優位になる土地へと嫁ぎ、兄の手助けをするという事。

愛する故郷、そして愛する兄と離れ、顔も知らない誰かへと嫁がねばならない。それを思うとリリナの胸は不安と寂しさで締め付けられた。けれどそれこそが、愛する故郷と兄を守る為に自分が出来る事なのだ。

(……わたくしが、出来る事。お兄様の為に、そうしてこの領地の為に)

けれどどんなに固く決意を結ぼうとしても、どうしてもあるひとりの面影が胸から離れない。

どれほど祈りを捧げても、リリナの心は乱れたままだった。

それは、ひと月前。

リリナは、兄が側近と自分の嫁ぎ先について話し合っているのを偶然耳にしまい、居た堪れない気持ちでつい町へと飛び出してしまったのだ。

いつかは、そんな日が来るとわかっていた。覚悟をしていた筈だった。

それなのに、具体的に話が進んでいるという事実が堪らなくて。そんな時に、突然振り出した雨。濡れてしまえば、泣いてもわからないと思った。

冷たい雨の滴が、リリナの細い身体を容赦なく濡らす。

雨に打たれたまま、目的地もなくひとりで歩いて行く。やがて町の中心にある広場に出た。

「……どうした？」

その時、不意に掛けられた声に驚いて振り向いた。急に雨が降り出した事もあって人影はまったくなかったのに。いつの間にか背後に立っていた青年は、心配そうな瞳で濡れて震えていたリリナを見つめている。

兄と比べると背が随分と高かった。そしてこの土地では珍しい、緋色の髪。その彼の髪も雨に濡れている。

泣いていたのがわかったしまったのかもしれない、とリリナは慌てて俯いた。すると、まるで怯えている子猫にでも接するかのよう

に、彼はそつと手を差し伸べた。

「……風邪を引いてしまうよ」

## 【2】 出逢い

見ず知らずの男性である。まして領主の妹であるリリナが、その手を取るのは無謀で愚かだったのだらう。けれど、その碧色の瞳はとても穏やかで、そして心配そうで。

リリナは思わず、その手を取ってしまった。濡れて冷え切った手に重なる温もり。あの時の彼の手の温かさは、今でも忘れる事が出来ない。

「取り合えずあの木の陰に。少しは雨を凌げるだらう」  
手を取って、彼は気遣うようにゆっくりと歩き出した。

その時、リリナの手を引いて歩く彼が少し足が不自由である事気が付いた。左の足を引き摺るようにして歩いている。不謹慎ではあるがそれに気付いた時、この兄よりも背の高い青年を恐れる気持ちがなくなるのを感じた。何かあれば走って逃げる事が出来るのだから。

ゆっくりとした足取りで木陰に入った彼は、リリナに話しかける訳でもなく、ただ静かに空から降り注ぐ雨音を聞いている。

「……」

身体を濡らす冷たさがなくなると、雨の降る静かな音は不思議と心を落ち着けてくれた。泣いている事に気付いただらうに、その青年は何も聞かずにただ傍に居てくれた。

あの時の気持ちを、何と表現したらいいのだらう。

安心感。そして、不思議な懐かしさ。

それは両親が亡くなってから初めて、リリナが感じた安らぎだった。未来への不安も怖さも、すべて消えていく感覚にリリナは瞳を閉じた。

もしかしたら両親が生きていた時ですら、こんなにも心から安心する時はなかったかもしれない。兄ではない男性と二人きりになったのは初めてだった。それなのに、恐怖を感じるよりも安心感を覚

えてしまうなんて。

雨に隔離された、二人だけの静かな時間。

それは唐突に終わりを告げた。

雨音が小さくなった事に気が付き、空を見上げると雨が止んでいる。

「……もう歩けるか？」

彼は優しい穏やかな声で、リリナにそう語りかけてきた。

気持ちは落ち着いたか、という意味だと気が付いて頷くと、彼はそつとリリナの手を引いた。

「少し歩いた場所に、俺の店がある。温かいお茶でも淹れよう」

このまま離れてしまいたくなかった。彼の名前も、何処に住んでいるのかも知らないままで。男性の家にひとりで行くのはさすがにはしたないが、店ならば。そう思い、こくりと頷いた。

彼に連れてこられた場所は、その広場からほんの少し歩いた所にあった。

古びた建物。赤い屋根は長い間雨風に晒されて色が少し変色している。その屋根のすぐ下に、文字が薄れかかった木の看板が掛けてあった。雑貨屋、何でも取り寄せますと書いてある文字を目で辿る。

（……雑貨屋さん……）

彼は少し軋む扉を開けて中に入る。少し埃っぽい店内。そして生活に関する雑貨などがほとんど無造作に積み重なっている。

店内は雑然としていたが、何処か安心する雰囲気だった。そして温かいお茶と優しい言葉に、どれほど安心しただろう。

彼はジルダーンと名乗った。彼はあの広場から近い場所に自宅があるにも関わらず、泣いていたリリナを連れ出したりも放って置いたりせず、気持ちは落ち着くまで傍にいてくれたのだ。

それから幾度となく、兄にも告げずにこの店を訪れていた。あの優しい笑顔に会うと心が軽くなった。不思議と懐かしく感じる、優しい笑顔。

ただ、会えるだけでよかった。



乱れた心のまま祈りの時間が終わり、リリナは館の私室へと戻った。

幼い頃から姉のように傍に居てくれた侍女のティナが、着替えを手伝ってくれる。

白い服から薄紅色のドレスに着替えようとしたリリナは、ふと手を止めた。女神への祈りを捧げても心が落ち着かない。こんな日は、あの優しい笑顔が堪らなく恋しくなる。

「……やっぱり出かけます」

「町に、ですか？」

ティナの質問に躊躇いもせずに頷く。両親がまだ健在だった頃から、リリナは度々町へと出掛けていた。豊かな土地とはいえ、王都から離れた領地である。領主の娘が町へ出る事に、両親もそんなに煩く言ったりはしなかった。

「お供いたしますか？」

「いえ、ひとりで大丈夫です。すぐに戻ります。……お兄様には、内密にして下さい」

「わかりました」

けれども亡き両親はともかく、兄は自分がひとりで町へ出る事を快く思っていないようだった。だからいつも兄が出かけた隙をみて町に出ていたのである。

それをティナは承知していた。棚の奥底から隠してあった衣服を取り出す。綺麗な色をしたシンプルな衣服。

「夕方頃には領主様が戻られます。ですから、その時刻まではどうかお戻り下さい」

「ええ、わかっています。……我俣を言つて、ごめんなさい」

着替えが終わったリリナは、町にいる普通の少女のような装いになっていた。いつもの領主家の姫としての彼女とは別人のような様相。年よりも少し幼く見える表情で何度も鏡を見直す。

### 【3】 リリナの花

「どうぞお気をつけて」

その様子を微笑ましそうに見ていたティナの言葉に、リリナも笑顔で頷く。

「ええ。行ってきます」

正門ではなく、裏門からこっそりと出る。ここは平和な地方の町。常に警備兵が眼を光らせている訳ではない。屋敷から出るのは簡単だった。そのまま町へと歩く。

目的は、町の中央にある一件の店。

「いらっしやいませー」

何度か通った、赤い屋根の建物。ゆつくりとその扉を開いた。だが、迎えてくれたのは予想していた低い優しい声ではなく、少し高い女性の声。

振り向くと、カウンターにはジルダンの姿はなかった。いたのは、見たこともないひとりの女性。リリナよりも五つくらい年上だろうか。綺麗な人だった。黒い髪に赤い唇をしている。そして女性らしいラインを強調した少し派手な衣服。驚いたまま立ち尽くすリリナを、彼女は少し不思議そうに眺めている。

「何かお探ですか？」

「いえ、あの……ジルダンさんは……」

「ああ、待ってね。奥にいるから。えーと、あなた、名前は？」

「リリナと申します」

「 K。ちよつとそこで待っててね」

見かけに寄らず、気さくな様子で黒い髪の女性は奥へと消えていった。リリナは店内に置かれていた鏡に映った姿を見て、髪を触ったり、衿を直したりする。

「リリ？」

しばらくして、待ち望んだ声が優しくリリナの名を呼ぶ。

何度か尋ねるうちに、自然と彼とは親しくなっていた。一年ほど前、北方にある土地からここへ移り住んできた事も知った。細身だが鍛えられている身体をしている彼は、剣士をしていたらしい。足を負傷し、剣士を引退してこの土地に移り住んで雑貨屋をしていたのだという。

彼が自分の事を語ってくれて、そして少しずつ彼の事を知っていくのがとても嬉しかった。それに比べてリリナは自分の素性は何も語っていない。告げたのは、リリナという名前だけ。住んでいる場所も素性も明かさないので、ジルダンはいつでも優しく迎えてくれたのだ。

「こんな時間から来るなんて珍しいね。……どうかしたのか？」

そう言われてみて初めて、朝の祈りを終えてすぐに来た事に気付く。

「あ……。いえ、すみません。わたし……」

迷惑だっただろうか。そう考えて顔を曇らせたリリナに、彼は首を振る。何か言う前に、リリナの気持ちがかかるかのように。大きく優しい手が、リリナの頬に触れた。

「いや。また、泣いてるのかと思って心配になっただけだ。……大丈夫みたいだね」

「大丈夫です」

ふわりと、リリナは微笑む。その花のような笑顔に、ジルダンも瞳を細めた。

「そうだ、リリ」

リリの艶やかな髪を優しく撫でていたジルダンは、ふと思いついたかのように立ち上がる。カウンターの奥へと手を伸ばし、小さな白い花が繊細な細工で彫りこまれている髪飾りを手に取る。

「この間、店の商品を仕入れた時に見つけたんだ。リリに、似合う

「と思って」

「あ……」

そつと手に渡された髪飾り。彼が自分の為を選んでくれた。それだけで、どんな宝玉よりも価値がある。

まるで宝物を手にしたかのように、髪飾りを抱き締めた。白い花。リリナと同じ名前の花だ。彼はそれを知っていたのだろうか。

「ジルが珍しく装飾品を見てると思ったら。その子の為だったんだねえ」

ふと笑いを含んだような声。我に返って顔を上げると、先程の黒髪の女性が笑みを浮かべてリリナを見つめていた。その瞳は好意的で、敵意など微塵も感じられない。

「初めまして、リリナさん。わたしはカリンエルって言うの。よろしくね」

「リリナです。こちらこそよろしくお願いします」

慌てて頭を下げるリリナを見て、ますます優しい瞳をした。外見ほど派手な女性ではないようだ。

「そうだ、リリナさん。ちょうど林檎のパイが焼けたのよ。もしよかったら一緒にどうかしら？ ジルは甘いものがあまり好きじゃないくて。リリナさんはどう？」

「林檎。はい、好きです」

「じゃあ、一緒に食べましょう。ジル、店番しててね」

彼女は親しげにリリナの手を引いて奥へと移動する。その様子にジルダーンは少し苦笑しながらも、頷いた。

店の奥に入ったのは初めてだった。石造りの床に、少し傾いた木のテーブル。暗い室内に、ほとんど物は置かれていない。カリンエルはリリナに椅子を勧めると、奥にある古いオープンから焼きたてのパイを取り出し、手馴れた様子でパイを切り分けている。その様子は最初の印象とはまったく異なり、家庭的で優しい女性なのだろうと察せられた。

## 【4】 涙

あの……。カリンエルさん」

優しくて、そしてとても綺麗な人。この店には何度か顔を出したが、彼女とは今日初めて出会った。ジルダーンとはどんな関係なのか。そう聞きかけて、聞いていいものかどうか躊躇う。

だって彼とはまだ、ただの知り合いだから。恋人同士でもないのに、そこまで聞いていいものだろうか。

「……」

そんなリリナの様子を察したのか。カリンエルは切り分けたパイをリリナに差し出しながら語り出した。

「私は、七日程前からこの店に雇われたの。彼とは以前から顔見知りだったけれどね。ジル、足が悪いのは知っている？」

「は、あい……」

「最近少し調子が悪いようだったから、店番とか手伝う事にしたの。大丈夫、ただそれだけの関係だから」

それだけ、を強調して笑う。リリナがその言葉を聞いて安心すると思っただろう。だからリリナも笑みを返して、切り分けてくれた林檎のパイを一口食べる。

「美味しいです」

「そう、よかった。まだいっぱいあるからね」

「はい、ありがとうございます」

甘酸っぱい林檎の香り。まだ温かいパイの甘さが口の中に広がる。本当は自分でももう気が付いていた。何も望まないといいながら顔を見られるだけで安心すると思ひ込みながら。もうとつくに彼の事が好きになっている事に。

けれど、それは許されない行為。兄が自分の人生すべてをこの領地を守る為に注いでいるように、リリナも望み通りに生きる訳にはいかないのだ。ひと月前に兄が側近と相談していた嫁ぎ先は、もう

決まったのだろうか。リリナも来月で十八になる。きっとそう遠い未来の話ではない。

もう、彼とは会わない方がいいのだろうか。

そして林檎のパイを、食べる度に彼を思い出すのだろうか。白い花の髪飾り。それを知らない土地で、ただひとりで。思い出として抱き締めて、残りの人生を過ごすのだろうか。

「……」

「リリナさん？」

カリンエルの戸惑った声。慌てて顔を上げた。けれど、視界がぼやけている。頬を涙が伝っている事に気が付いて、リリナは慌てて顔を覆う。

「……ごめん、なさい。何でもないんです……」

「何でもなく、ないだろう」

不意に、肩を抱き寄せられた。至近距離に、ジルダーンの緋色の髪。

「ジルダーンさん……」

「来た時から様子がおかしいと思っていた。話せない事情があるのなら、無理に聞かない。だから、泣きたい時は泣いていいんだ」

しっかりと抱き寄せられ、力強い腕に涙が止まらなくなる。どうして自分はこんなにも弱いのだろうか。

自己嫌悪、そして不安をどうしても抑える事が出来なくて、リリナはその腕に縋りついた。

カリンエルがそつと席を立った気配がした。気を利かせてくれたのだろう。優しい腕の温もりの中で。リリナは瞳を閉ざす。黒い闇は、温かな腕の感触だけを伝えてくれて。

何も考えたくない。

ただ、この温もりに縋っていたかった。

そのまま腕の中で眠ってしまったりリリナを、そつと大切に奥の寝台に横たえて、ジルダーンは店へと戻る。カリンエルが複雑そうな

顔でそれを迎えた。

「……わかつていると思うけど、あえて言うよ。あの子、どう見ても町娘には見えないわ」

念入りに手入れされている白い肌。艶やかな金の髪。町娘のような装いをしていても、その素材は高級であることがわかる。素性も名乗らず、寂しげな瞳をした儂い少女。

「わかつている」

ジルダーンは短くそう答える。背まで伸びている緋色の髪を無造作に束ねて、カウンターに置かれている椅子に座った。いつもリリナに見せる優しげな表情ではない。どうやっても解決出来ない、難題を抱えているかのような様子で溜息を付く。

「……ジル」

カリンエルはそんなジルダーンを見つめる。そう、彼だってこの町に来た当初は、リリナのように少し町の者と違っていたと思いつく。一年も経った今となっては、もうその違和感はほとんど感じられなかったけれど。彼もまた、何らかの深い事情を抱えているのだろうか。

けれど、カリンエルには何も出来ない。何も事情を知る事が許されないのならば、出来る事もやはり何もないのだ。

「……どうする？ 少し、寝かせておくの？」

寂しいという感情を押し殺して、何でもない様子を装って、声を掛ける。

「ああ。傍に居てやってくれないか？」

「ええ、もちろん」

カリンエルが頷き、部屋へと移動する。それを見送り、ジルダーンはカウンターのの中から店内をゆっくりと見渡した。

## 【5】 過去の出会い

(……リリ)

リリナ・リンドレル・クラーリン。

この土地の領主の妹である。ジルダーンはとくに彼女の正体に気付いていた。いや、知っていたのだ。

彼女は覚えていないだろう。それはもう遠い遠い、昔の話。

あの時出逢ったリリナは、まだ幼い子供だった。けれどひと月前に出会った時、ジルダーンにはすぐに懐かしい記憶の少女だとわかった。

それはもう戻らない、幸せだった頃の幼い記憶。

けれどリリナがそれを覚えていないことに、ジルダーンは安堵していた。

本当ならば、思い出して欲しい。あのとき共有した幸福な日々を、彼女と懐かしく語り合いたい。そう、それはまるで春の日だまりのように、穏やかで暖かな記憶。

しかしあの後起こった事件を、思い出して欲しくはなかった。きつと幼い彼女はとも傷付いた筈だ。

守れなかった。それは今もまだ胸に燃え続ける、消えない後悔の炎。

せめて今は幸せでいて欲しいと、ずっと祈っていたというのに。

涙を堪えようとせずに雨に打たれていた少女。それを思い出す度に、ジルダーンの心は痛んだ。あの華奢な身体で、彼女は何に耐えているのだろう。

守りたい。今度こそ、決して傷付けないように。

けれど、今はまだ彼女の傍にすることは出来ない。

亡き者に捧げた言葉がある。生涯の友と、誓った約束がある。それを果たさなければならぬのだ。

いつか、この約束を果たした時には。



その時こそは、本当の名前を名乗り、彼女の傍にいたい。昔の記憶がもし彼女を傷付けたとしても、今度こそ、きつと守りきつてみせる。

けれどいつになるかわからない、その約束が果たされる日まで、彼女の手を取る者はいないという保障はない。

あんなにも、まるで満開の花のようにリリナは美しく成長していたのだから。

もし、自分より先にその手を取る者がいたら。そしてリリナがそれを、受け入れたのならば。

（ああ、またこの夢だわ……）

花の香りが漂ってきて、リリナは夢の中で呟く。

繰り返し、何度も見る夢があった。

広大な美しい庭園の中を、ひとりの少年と手を繋いで歩く夢だ。季節は、きつと春なのだろう。暖かく穏やかな陽射しが降り注ぎ、庭園には美しい花が咲き乱れている。

夢の中の自分は本当にまだ幼い少女だった。そして自分よりも背の高いその少年が、とても好きだった。歩きながら何度も嬉しそうに、彼を見上げながら話しかけている。

その少年の顔はぼやけていて、いつもよくわからない。けれども優しく、欲しがる花はすべて取ってくれた。リリナの指が傷付かないように、花の棘などもすべて取り除いて手渡してくれる。

楽しい時間。夢の中のリリナは何度も声を上げて笑った。

けれど、楽しい時間には必ず終わりが来る。少年は寂しげな顔で、もうすぐお別れだね、と呟いた。嫌だ、ずっと一緒に居たい。

「いけないで、ずっと傍に居て」

そう泣き叫ぶ声に、目が覚める。いつも同じだった。その少年に心当たりもなく、庭園も見覚えのない場所だった。けれど堪らない幸福感と、それを近い将来、失ってしまうのだという喪失感だけ

が目覚めた後もずっと心の中に残っている。

とても寂しい。そして、とても悲しい。涙が頬を流れていく。

「……いけないで」

「リリ？」

夢の中に心を置いてきてしまったかのように、悲しい気持ちのまま目が覚めた。いつもと違う、固い寝台の感触。ここはどこだろう、と辺りを見渡すと、心配そうな碧い瞳がリリナを見下ろしていた。

「ジルダーン、さん？」

まだ夢の中なのかもしれない。目が覚めたら、彼が傍に居てくれたなんて。

けれど彼の後ろに心配そうなカリンエルの姿を認め、これが夢ではないと知る。

「ご、ごめんなさい。私……」

彼の腕に縋ったまま、泣きながら眠ってしまった事に気付いたりリナは、真っ赤になって寝台から身体を起こす。

「落ち着いた？」

「……はい、本当にごめんなさい」

落ち着くと途端に気恥ずかしくなって、リリナは俯いた。

男性の腕の中で、眠ってしまうなんて。

けれどジルダーンは、まるで父親のような優しい笑みを浮かべるだけだ。

どうして。

名前しか名乗らない、こんな自分に優しくしてくれるのだろう。

彼の優しさはとても心地がよかったから、不審には思わなかったけれど、不思議ではあった。ジルダーンの顔を見上げると、視線に気が付いたのだろう。安心させるかのように、泣き腫らして赤くなった頬を撫でる。

「少し冷やした方がいいな」

そう言って立ち上がる。

（あ……）

離れる温もり。リリナは咄嗟にその腕にしがみついていた。さっき見た夢と、混同してしまったのかもしれない。

けれど彼が遠く離れてしまうような気がして。

「……リリ？」

ジルダーンの驚く気配がする。けれど、リリナはどうしても止められなかった。

「いけないで。ずっと、傍にいて……」

## 【6】 恋

それは、夢の中で幼い少女である自分が叫んでいた言葉だった。この手を離したくない。離してしまえば、もう会えなくなってしまう。けれど言ってしまった後になって、リリナは我に返って頬を染める。

ここは夢の中ではない。彼は、あの少年ではないのだ。

「ご、ごめんなさい」

けれどジルダーンは、驚愕の表情のままだった。何が彼をそんなにも驚かせてしまったのだろう。リリナは戸惑い、そっと縋り付いた腕を離す。

「あの……。ジルターンさん？」

声を掛けるとようやく、ジルダーンはいつものように優しくリリナに微笑む。

けれど、言葉はなかった。

何故そんなにも驚いたのか。それを、最後まで彼は語ろうとしなかった。

（……ジルターンさん）

林檎のパイをお土産に貰って、リリナはゆっくりと町を歩いていた。

まだ昼前。屋敷に戻るのは早いだろう。豊かな自然の中を歩きながらリリナが考えていたのは、彼のことだった。先程の驚愕の表情を思い出す。

そして、思う。

彼もまた自分のように、語ることの出来ない秘密を抱えているのではないかと。

あまり深入りしてはいけない、と思っていた。いつかは別れなければならぬのだから。けれど会わずにもいらなくて。

それは、とても自分勝手な行動。自分の寂しさの為に彼を利用していたのではないだろうか。

彼の緋色の鮮やかな髪。北の方から来たと言っていたが、それはどの領地なのか。剣士と言っていたが、傭兵だったのだろうか。どうしてこの地に移住してきたのだろうか。あの雑貨屋は、かなり年季が入っているように見えた。こういった経路で彼の物になったのだろう。

いつも優しくしてくれた。だから何も考えなかった。けれど、いつもと違う彼の表情に触れて。知りたいと思ってしまった。彼の優しさだけではなく。もっとたくさんの事を。

この気持ちは、きつと禁忌だ。けれどもう、止める術をリリナ自身も知らなかった。

後悔するだろう。きつと、もっとたくさんの涙を流すことになるだろう。けれど。それでも。

触れたい。声が聞きたい。彼の事が、知りたい。

それはまるで、空から魔法が降ってきたようだった。突然宿った、強い想い。

それはもうリリナのものであっても、リリナの自由にはならない。見上げた空が、とても高く。そして、青かった。

この青さをきつと、生涯忘れる事はないだろう。

ゆつくりと野外で過ごし、屋敷へと戻った。

兄はまだ帰っていない様子だ。裏門からこっそりと入ると、私室へと戻る。

ティナの姿はなかった。きつと雑用に追われているのだろう。衣服を着替え、大切に大切に持っていた髪飾りを宝石箱の中へとしまふ。とても大切なものだが、兄に見つかったら彼のことを話さなければならなくなってしまう。それに身につけなくともこれがあるというだけで、心が落ち着く気がした。

ほどなくリリナの帰宅に気が付いたティナが、部屋へとやってき

た。

「姫様。お戻りになられたのですね」

「ええ。先程戻りました。着替えは自分でしました。大丈夫です」  
そして兄が戻ったのは、予定よりも少し早い時間だった。

「領主様がお呼びです」

ティナに告げられ、リリナは立ち上がる。

「わかりました。すぐに向かいます」

兄は、隣の領地に赴いていた。移民の問題や、国境に住み着く盗賊の取り締まりなどを話し合う為である。

「リリナです」

入室を促す兄の声に、リリナは従う。

「お帰りなさい、お兄様」

領主である兄カインドールは、傍らに見たことのない女性を連れていた。

「妹のリリナ・リンドレル・クラーリンです。リリナ、こちらはジョアンナ・エディエル。エディエル領主殿のご息女だ」

「……初めまして、ジョアンナ様。リリナと申します」

エディエル領は、隣の領主の妹が嫁いでいる領地である。リリナの居るこのクラーリン領からは少し遠い、西の砂漠付近の土地だ。その領地の娘を何故、兄は伴って帰ってきたのか。その理由はすぐに察せられた。彼女はきつと兄の花嫁候補なのだろう。

ジョアンナと紹介されたその女性は、砂漠の地方に住んでいる者の特徴である浅黒い肌と、艶やかな茶色の髪をしていた。背はリリナよりも随分と高い。顔立ちは整ってはいるが、その黒い瞳は随分と強い光を宿していた。まるで値踏みするかのように、視線をリリナの全身へと送る。

「……ジョアンナです。よろしく、リリナ様」

気の強そうなその女性に、少し苦手意識を持ったリリナだったが、兄の花嫁になるのであればそんな表情はしてはいけない。リリナは淡い微笑みを浮かべて、丁寧にお辞儀をする。

## 【7】 兄の花嫁

兄からはしばらく滞在する事になったその女性についてあまり詳しく説明はなかったが、西の奥にある部屋を彼女の居室に指定した事でわかった。そこは以前、兄とリリナの母が暮らしていた部屋。つまり、領主の妻の居室だ。

（お兄様の花嫁が決まった……）

それは、自分が他の領地へ嫁ぐ日もそう遠くないという事実。心が騒ぐ。

「リリナ、この領地の事を色々とジョアンナに教えてやってくれ」

「はい、お兄様」

ジョアンナを居室へと侍女が案内していく。兄と二人きりになったリリナは、兄の少し疲れたような表情を見つめた。

「リリナ？」

「お兄様、お疲れですね。大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。それより、これから色々と騒がしくなるかもしれない」

「……ご結婚、なさるのですか？ あの方と」

兄はあまり乗り気ではないようだ、とそのとき初めて気が付いた。リリナと二人きりでいる時だけ、兄は領主の顔ではなくなる。

「隣の領主には、父が亡くなった時に随分世話になった。彼からの推薦では断れないだろう。隣の領地との関係が悪化するのも危険だ。」

……だが、彼女の実家の領主は随分と野心的でな。我々は、国王陛下から土地を預かって管理しているだけだというのに」

真面目な兄は、国王への忠誠心も厚い。溜息を付きながらも、それでも彼女を伴って帰ってきたという事は、この話はもう決定したのだろう。

「では、あの方と……」

「……近いうちにする事になるだろう。だがどんな家から嫁ごとと、

この領地の人間になったからにはこの地の方針に従って貰う。リリナ。お前と同じ生活をするように、彼女に色々と教えてやってくれ」  
「わかりました。お兄様」

兄の言葉に頷いたものの、不安が胸をよぎる。

毎朝聖堂へ行き、身を清めて祈りを捧げる。彼女にそんな生活が出来るのだろうか。けれどやらなければならない。忙しい兄にこれ以上負担を掛ける訳にはいかないのだから。

だが、明日からの生活を色々と説明をしようとジョアンナの部屋を訪れたリリナは、彼女が実家から伴ってきた侍女に部屋の前で拒まれてしまった。

「長旅でジョアンナ様はとてもお疲れです。お話は明日にして下さいませ」

扉の前に居座ったまま、絶対に動こうとしない侍女にそれ以上強く言えず、リリナは仕方なく私室へと戻る。

（明日からは無理ね……）

女神の聖堂に入るのは、早朝と決められていた。だが本来、女神に祈りを捧げるのは領主の妻の役目なのだ。リリナは代役に過ぎない。

「でも、エディエル領は本当に遠いわ。とてもお疲れだったのよ、きつと」

部屋にある小さな机について座り、呟く。そして窓から注ぐ緋色の光の帯に気が付き、何気なく窓の外を見た。

綺麗な夕焼けだった。いつのまにか夕刻になっていたらしい。

その美しさに心を奪われ、立ち上がって窓を開ける。外の景色を眺めた。

「……綺麗な色」

空も建物も、そして山や木も、すべて緋色に染まっていた。その色がジルダーンを思い出させ、リリナは両手を胸の辺りで組み合わせながら、微笑む。

「とても綺麗」



まるで夢を見ているような瞳で、好きな人の名前を口にするかの  
ように、リリナは呟く。

不思議だった。

彼を思い出すと、ジョアンナと上手くやれそうにない不安とか、  
自分の嫁ぎ先への不安が綺麗に消えていく気がする。

会いたい。

今日会ったばかりなのに、また会いたい。いつものように優しく、  
リリと呼んで欲しい。

けれどこれからは、兄が外出していてもそうそう町に出る事は出  
来ないだろう。ジョアンナがいるのだから。

次はいつ逢えるのだろう。

風が強く吹いているようだ。

入り口の古びた扉が風が吹く度にガタガタと音を立て、冷たい空  
気を部屋の中に招き入れている。

（冬になる前に直さないとね……）

店番をしていたカリンエルはちらりと入り口に視線を向け、そん  
な事を考えた。

風の音だけが響く。店内はとても静かだった。

悪天候の為に客が少ないのもあったが、自分の雇い主でもある店  
主の様子がいつもと違う。何度か話しかけたが上の空で、別の何か  
に気を取られているようだ。

（きっとあの子のことなんだろうな……）

あのリリナという少女。

## 【8】 祈る

同性の自分から見ても、守ってあげたくなるような可愛らしい容姿をしていた。

重いものなど一度も持ったことのないような細い手足。まったく日焼けしていない美しい金髪。どう見ても労働階級出身ではない。そんな少女とどうやって知り合ったのだろうか。

興味はあった。けれどそれを尋ねたりはしなかった。きっと彼は答えないだろう。傍で見てもわかるくらい、ジルダーンは彼女のことをとても大切にしている。

その彼女が、最近姿を現さない。

きっと自分から会いに行く術を持たないのだろう。ジルダーンはただ静かに、彼女の訪れを待っている。

（せつないな……）

きっとリリナも彼に好意を持っている。あんなにも嬉しそうに彼に会いに来るのだから。

だが貧富の差ならば本人次第だが、身分の差だけはどうしてもない。この大陸は身分には特に厳しかった。

どうせ不幸に終わってしまうのなら、ふたりはもう会わない方がいいのかもしれない。

カリンエルは彼が反応しないとわかっていても、話を続ける。

「そういえば、ここの領主が結婚するみたいよ。お祭りになるのかしら？」

「……結婚？」

予想に反して、ジルダーンはその言葉に反応した。ぼんやりと外へと向けていた視線が、はっとする程の鋭さでカリンエルへと移る。「どこの領主の女性と？」

「何だっただかしら……。確か砂漠の方だったって聞いたわ。ええと……エディ……？」

尋ねる彼の瞳は、今まで見たこともないくらい険しい。

(……ジル?)

知り合って約一年。

決して長い時間ではないが、毎日のように顔を合わせていたのだ。彼のことはほとんど知っていると置いていた。

けれど、こんな顔をするジルダーンを知らない。

「エディーエル領か。領主の年と釣り合う女性といえ……。あの、ジョアンナか……?」

厳しい顔をして考え込んでいる彼に、声を掛けることすら出来ない。ジルダーンはしばらく思索していたかと思うと、おもむろに部屋奥へと移動した。

「ジル?」

思わず後を追う。だが彼はすぐに戻ってきた。その手に握られているのは、手入れが行き届いた長剣。

「何を……」

ここに来るまでは剣士だったというのは知っていた。けれど、剣を持つ姿など一度も見たことがなかった。いったいどうしたのだろうか。

「すまないが少し出かけてくる。店を頼む」

それだけ告げると、少し足を引き摺るようにしながらも出て行くとする。

「ジルダーン……」

何があつたのか。何をしようとしているのか。尋ねようとした。

けれど結局、カリンエルはその言葉を口にしない。剣を手にしたジルダーンは、まるで自分の知らない人間のようだったから。

きっとリリナと同じく、彼も違う世界の人間なのだ。そう思った理由は、自分でもわからない。けれどずっとここにいるような人間ではないということだけは、理解していた。

だから今は、ただ彼にこう言う。笑顔で。

「わかった。いつてらっしゃい。気を付けてね。無理したら駄目よ」

掛けられた声に、厳しい顔をしていたジルダーンがほんの少しだけ、表情を緩める。

「ああ。いつてくる」

そしてそう言い残し、彼の姿は店の外へ消えた。

ひとりになったカリネルは、誰もいない店内に視線を廻らせ、風の音を聞きながら瞳を閉じた。寂しいという気持ちと、仕方がないという気持ちが混同する。けれどせめて。

あのふたりはずっと、一緒にいられますように。

兄の花嫁になる女性が来てから、何日が経ったのだろう。

リリナは祈りの為の白い衣装から着替え、ティナに気付かれないようにそつと溜息を付く。あれから何度かジョアンナの元へと向かったが、一度も会う事が出来なかった。慣れない土地で体調を崩してしまったのだと、彼女が伴ってきた侍女は心配げにそう言っていた。

確かにジョアンナの生まれ育ったエディエル領に比べると、ここは寒いかもしれない。兄も慣れるまでは仕方がない、と言っていたが、役目を果たせない罪悪感がリリナの胸に重くのしかかる。はやくジョアンナに、この領地での役目を伝えなければならぬのに。兄は朝から隣の領地へと出かけていた。領土境にある川の使用権について、話し合う必要があるらしい。きつと帰りは夜遅くになるだろう。そしてジョアンナも、朝食も部屋で取ると連絡があった。

(……今日なら)

兄が仕事で出かけているのに、という罪悪感があった。けれど、今日を逃してしまえば今度はいつ会えるかわからない。

会いたい。

あの優しい声が聞きたい。

ティナにも告げず、ひとりで着替えをして周囲の様子を探る。ま

だ早朝。人目はほとんどない。会っただけだ。すぐに戻れば心配を  
かけないだろう。

リリナはそっと、屋敷の外へと駆け出した。

## 【9】 雨の襲撃

もうすぐジルダーンに会える。その時リリナは、恋する人に会いたくて、ただ夢中になっていた。

「雨……」

逸るその足を止めるかのように、冷たい滴が空から降り注ぐ。けれど、それを見上げたリリナの表情は穏やかだった。

「あるとき雨が降らなかつたら、出逢えなかつたかもしれないわ」  
そう思うと、突然降り出した雨ですら愛しく思えてくる。

吹く風にも耐えられないかのように見える儚い少女は、次第に強くなる雨の中を、微笑みさえ浮かべて駆けていった。愛しい人に逢えるという喜びを胸に。

ただそれだけに夢中で、リリナは背後から忍び寄る影にはまったく気が付かなかった。雨が降っていなければ、その足音に最後まで気付かなかつただろう。

突然、ぴちゃりと湿った音が、人気のない街道にやけに大きく響き渡った。

（え……？）

その音に背筋が冷えるような感覚を覚え、足を止める。恐怖に胸を支配されながらも、ゆっくりと振り向く。すると目に入ったのは、複数の人影。

全員、顔を隠している。それは、彼等が真つ当な者ではないという証明でもあった。いつのまに、背後に忍び寄っていたのだろう。

リリナの退路を断つかのように取り囲み、手には不吉に光る銀色の剣。その凶器が放つ冷たい光に、逃れなければと思うのに足が竦む。「可愛いじゃないか。殺すのは惜しいくらいだな」

その中のひとりが、低く押し殺した声で笑う。その声、言葉に身体が震える。

殺す。男は確かにそう言った。

(どうして……?)

数多い領地の中のひとつである、領主の妹に過ぎない自分がどうして命を狙われているのだろう。身に覚えなどない。そもそもリリナは、ほとんど他人と会った事がないのだ。けれど例え覚えがなくても、目の前の男達の殺気は本物だ。何の躊躇もなくその白刃を振り翳すだろう。

「嫌ッ……」

まだ会っていない。ジルダーンに会わないまま、死にたくはない。この思いだけが、恐怖に震える身体を動かした。走る。

だが、恐怖で思うように動かない足。そして、普段走ることのないリリナのか弱い身体はすぐに悲鳴を上げる。

「あッ」

雨に濡れた地面に足を取られ、転ぶ。打ち据えた身体は、焦るリリナの意志とは裏腹にすぐに起き上がってはくれなかった。美しい金色の髪が泥に染まっていく。

そんなリリナの恐怖さえ楽しむかのように、ゆっくりと男達は近寄ってくる。

「……ジルダーンさん」

知らず、その名前が唇から零れ出た。自分ひとりの力では、どうやってもあの刃から逃れる事は出来ないように思われた。理由もわからずに殺されてしまうのは悲しかったが、誰かにそこまで恨まれてしまう覚えはない。きっと私怨ではないのだろう。これが自分の運命ならば仕方ないのかもしれない、という考えが僅かに胸の内に浮かぶ。

でも、そうだとしても。せめて最後に、彼に会いたかった……。恐ろしくても、瞳は閉じなかった。迫り来る男達をしっかりと見つめる。

だが。

リリナの元へと向かっていた彼等の前に、不意に立ちはだかった

影があつた。

鮮やかな、緋色。

「え……」

これは夢なのだろうか。

あまりにも切望しすぎた自分が見た、幻なのではないだろうか。

「リリ」

呼ぶ声が聞こえる。

まだ信じられぬまま、見上げたその視線の先には、誰よりも会いたかった人の姿。

「間に合つてよかった」

安堵を滲ませた優しい声に、張り詰めていた心が溶ける。まるで、春の暖かい陽射しを受けた雪のように。

涙がこぼれ落ちた。

「ジルダーンさん……」

リリナに向けられていた優しい表情は、彼女を追い詰めていた男達に向き直るとまるで別人のように変化した。

「何だ、お前は」

突然の乱入者に、獲物を寸前まで追い詰めていた男達は不快を隠そうともせずに怒鳴る。だが、ジルダーンは何も答えない。ただその右手に握り締めていた剣を抜く。

それが何よりも宣戦布告になる。

（待つて……。ジルダーンさんは、足が……）

剣士だった、とは聞いていた。けれど、あの不自由な足で剣を振るえるのだろうか。彼を庇おうと、リリナはようやく立ち上がる。



## 【10】 雨の襲撃？

キン、と乾いた金属音が響き渡ったのはその時だった。

「え……」

あまりにも速すぎて、リリナには何が起こったのかわからなかった。視線を前方に移すと、リリナを襲った男達の中の二人が、何も持っていない手を押さえて蹲っている。

「なに……？」

容易な相手ではないと悟ったのだろう。空気が殺気を帯びる。

剣を弾かれた二人は、腕に傷を負っていた。赤い血が恐ろしくて直視することは出来なかったが、恐らく今はもう戦えないだろう。

だとすれば、残りはあと二人。

仲間があつという間に倒されたのを見ていた彼等は、慎重だった。両脇から挟むように、徐々に距離を詰めてくる。だが、ジルダーンは微動だにしない。ただ静かに、彼等が自分の間合いに入るのを待っているかのようにだった。静かな緊張に耐えかねた右側の男が、かけ声と共に剣を振りかざした。剣を持ったまま、三步。ジルダーンに向かって踏み込む。

だが、そこはもうジルダーンの間合いだった。

彼は踏み込みをせず、上半身だけの力で剣を振った。狙いは正確にその男の手元を襲う。いくら剣を離すまいとしっかりと握っていても、その一撃は重く、たちまち男の手から武器を奪い取る。

雨に濡れた地面に、剣がぴちやりと音を立てて落ちた。武器を失った男は、素手で彼の間合いにいる恐怖に耐えきれず、後退りをして距離を置く。

残ったのは、左にいる男だけ。

間近で彼の剣技を見ていたその男は、ジルダーンが仲間の手から武器を払い落とすと同時に動き出していた。

だが、目指す先にいたのは彼ではない。

震える足で、ようやく立ち上がったリリナだった。

「きゃ……」

「リリ？」

ひとりで対峙できる相手ではないと悟った男は、手っ取り早く本来の目的を果たそうとしたのか。それとも、リリナを人質に取ろうとしたのだろうか。けれど、どちらだとしてもそれは叶わなかった。リリナの危機に、ジルダーンは自ら間合いを詰め、男の前に飛び出した。繰り出された剣を自らの剣で受け止め、渾身の力で弾き返す。

「……っ」

だがその動きは、足に負担を掛けたのだろう。彼が僅かに顔をしかめたのを、リリナは見ていた。

「誰かッ」

雨音に負けないように、声を張り上げる。こんなに大きい声を出したのは初めてかもしれない。

「誰か、来て！ 助けて！」

雨で人気がなかったとはいえ、町の中である。

少女の悲鳴に、誰かが答える声がした。

「くそッ……」

人の気配を感じたその男は、引き際だと悟ったのだろう。倒れ伏す仲間を乱暴に引き立て、逃げるように走り去っていった。

「ジルダーンさん」

安堵の溜息をついたリリナは、窮地を救ってくれた愛しい人の元に走り寄り、自分よりかなり背の高い彼の身体を支える。

「リリ、無事か？」

「……はい。助けてくださって、ありがとうございます」

ほんの少しだけ、リリナに身体を預けていたジルダーンは、彼女の金の美しい髪が泥に染まっているのを気にして、優しい手つきで拭ってくれた。暖かい腕。この腕の中はきっと何処よりも安全な場所。

「う……」

先程よりも強く、涙がこみあげてくる。震える手足。いつのまにか支えていた筈の彼の身体に、リリナは必死にしがみついていた。

「……怖かつ……」

「リリ、もう大丈夫だ。心配いらない。俺が、いるから」

声をあげて泣くリリナを腕に抱いて、まるで小さな子供に接するかのように優しく背を撫でてくれた。

雨が降っている。

やっぱり雨は、彼と出逢わせてくれるのだ。

助けに来てくれた町の者に、盗賊らしき者に襲われたのだと説明し、特徴などを伝えた後、リリナはジルダーンに連れられて彼の店に来ていた。

何かあったのだとわかっただろうに、カリンエルは何も言わず、何も聞かずに、濡れたリリナに着替えを貸してくれ、温かいお茶を煎れてくれた。

「外は雨だし、しばらく休んでいった方がいいよ。二度も濡れたら、風邪を引いちゃうからね」

何処から持ってきたのか、暖かい毛布まで貸してくれた。リリナは濡れて冷えた身体を毛布で包み込み、お茶を一口飲む。

（温かい……）

## 【11】 微睡み

殺されるところだった。

その恐怖はまだ胸に、刻印のように残っている。けれど、ここはジルダーンの家。他の何処よりも安全な場所だ。

リリナは、あの絶体絶命の時に目にした鮮やかな緋色を思い出す。彼は偶然、剣を手にあの場所を通りかかったのだろうか。けれどどんな理由だったとしても、ジルダーンが命を救ってくれたのは確かだ。

そんなことを考えながらも、極度の緊張による疲労からいつしかリリナは微睡みの中に落ちていった。

花の香り。また、いつもの夢だった。

まるで楽園のような美しい場所だ。咲き乱れる花。百花繚乱の光景。

その中で幼いリリナは、泣いてあの少年を困らせていた。

「嫌よ。帰りたくない。ずっと一緒に居たいの」

少年は、泣いているリリナの頬に触れた。涙で冷たくなった頬に、温かい感触。

「泣かないで、リリ。またすぐに逢えるから」  
リリ。

名前を呼んでくれるその声に、泣きたくなくなるほどの懐かしさを感じる。とても遠く。けれどとても近くにいてくれるかのように。

もっと話したい。

名前を、教えて欲しい。

そう願う心とは裏腹に、浅い微睡みはリリナを現実へと引き戻してしまふ。

「……ここは」

目を覚ましたリリナの瞳に映ったもの。それは、見慣れた私室の風景だった。

「リリナ様」

呟いた声を聞き取ったのだろう。侍女のティナが駆け寄ってきた。「雨に打たれたせいで、風邪を引かれましたたのでしよう。熱が下がるまで、どうかごゆっくりとお休み下さい」

「……」

どうやってここに戻ってきたのだろう。確かジルダーンの家にした筈だ。

「わたくし、どうしてここに？」

熱が出ていると言われた。そのせいなのかもしれない。頭がぼんやりとして、思考がなかなか纏まらなかった。

「領主様が帰られた時にジョアンナ様が、姫様のお姿が見えない、とおっしゃいます。屋敷の者に探させたところ、姫様が見知らぬ男に連れ去られたとの情報が入った、と」

「……そう、だったの」

襲われたときの恐怖を思い出して身体を震わせる。あの時、ジルダーンが来てくれなければどうなっていたか。

（……え？）

その恐怖を押し込めながら、ティナの言葉を反芻していたリリナは、ある違和感に気が付く。

あのとき、町の人達が駆け付けてくれたが屋敷の者などいなかった。それに、リリナは連れ去られたりしていない。ジルダーンが助けてくれたのだから。

何故ジョアンナはそんな言葉を兄に告げたのか。それだけ聞いてしまえば、まるでジルダーンがリリナを連れ去ってしまったように思わないだろうか。

「リリナ様！」

力なく横たわっていたリリナが、突然弾かれたように起き上がる。しかもそのまま、薄着のまま部屋の外へ駆け出したのをみて、テ

イナは悲鳴に近い声を上げた。

「そのような姿で！　まだ、お身体が」

どんなに声を張り上げても、彼女の耳には届いていないようだった。ティナは部屋の中に置かれていた暖かい上着を手に、その後を追う。

「お待ち下さい、リリナ様！」

リリナが駆け込んだのは、兄であるカインドールの部屋だった。

「お兄様ッ」

熱を出して寝込んでいた妹が、あの憤み深いリリナが薄着のまま、ノックもせずに部屋に飛び込んできた。さすがにいつもは冷静沈着な若き領主も、驚いて立ち上がる。

「リリナ？」

ひとりの時でよかった。妹といえど、年頃の少女だ。目のやり場に困りながら、カインドールは背に羽織っていた上着をリリナの肩に掛ける。

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

妹付きの侍女が、部屋の前まで追ってきた気配を感じる。けれど領主の部屋には無断では入る事が出来ない。カインドールは侍女に声を掛けてその場に待機させ、まだ熱を帯びた妹を柔らかな椅子に座らせる。

「お兄様、私を、私を助けて下さった方をどうなさいましたか」

息を切らしながら、縋るような視線で妹はそう告げた。

「あの緋色の髪をした剣士のことか？」

こくこくと、何度も頷くリリナの瞳は潤んでいて、頬はほんのりとピンク色に染まっている。きっと熱があるせいだ、とカインドールは思う。

けれど、本当にそれだけだろうか？

## 【12】 兄と妹

「大丈夫だ。ジョアンナはお前を襲った犯人と勘違いしたそうだが、町の人達の証言で、彼こそがお前を助けてくれたのだとわかっていゝる。犯人を捜す協力をして貰おうとこの屋敷に呼んでいるが、お前が心配するようなことは何もしていない」

何故、自分のいない時に町へ行つたのか。

誰に会いにしようとしたのか。

そして、あの剣士とは顔見知りなのか。

聞きたいことは山程あつたが、妹は元々身体が丈夫ではない。話を聞くのはもう少し落ち着いてからでいい。

「だから心配せずにゆつくりと休んでいる。犯人も、必ず見つける。

……無事でよかった」

今更ながら、残されたたったひとりの妹を失うところだつたと思ひ知り、カインドールは妹の華奢な身体を抱き締めた。

もう二度と、大切な家族を失いたくはなかつた。

「はい。お兄様。突然申し訳ありませんでした」

兄の言葉にリリナは素直に頷いた。カインドールは、待機しているリリナの侍女に妹を託し、ゆつくりと休ませるようにと告げる。

（しかし、いったい誰がリリナを）

領主である自分を、というのならばわかる。だが妹のリリナを襲つて何の得があるのだらう。妹は人に恨まれるような少女ではない。優しく控えめで、信仰心も厚い。

（……）

ふと、過去の事件が頭をよぎつた。

けれどももうあれは遠い昔のことだ。当時のことを覚えている者も今はもうほとんどいない。それにあれは事故であり、リリナに非はないのだ。

もしかしたら自分への脅しという可能性もあるのかもしれない。

もう少し情報が欲しかった。だが殺されそうになつて怯えている妹に、その時のことを思い出させるのは出来れば避けたい。リリナを助けてくれたあの剣士に詳しい事情を聞こう。そう考え、カインドールは部屋を出る。

だが、あの緋色の髪をした剣士にも不審な点はいくつかあった。元々この領地の者ではないらしい。このクラーリンは比較的豊かな土地だったから、流れ者はそう珍しくはない。だがいくら剣士だったとはいえ、彼の身のこなしはあまりにも隙がなさすぎる。立ち振る舞いも、ただの町の者にしては洗練されていた。

彼もまた、何かの意図があつてリリナに近付いたのではないのだろうか。そんな疑惑がカインドールの胸には沸き上がっていた。側近をひとり連れ、彼のいる部屋へと向かう。だがいくら不審だとはいえ、妹を助けてくれた恩人だ。あまり粗末な扱いは出来ず、客間に通してあつた。念のために見張りは目立たないように置いてある。

領主の姿を見ると彼はすつと立ち上がり、一礼をした。

普通の階級の者ならば、領主の前には膝をつく。一礼で許されるのは側近くに仕える者だけだ。

何処か別の領主の側近なのではないか。カインドールの疑惑はますます深まる。

彼への質問は、同行していた側近が行った。

「巧妙に隠していましたが、浅黒い肌をしていました。恐らく、南の方の者かと」

襲撃者はどんな装いだったのかと聞かれ、彼はそう答えた。

「南……」

このクラーリン領で、南方の出身者と言われてすぐに思いつくのは、いずれ妻になるジョアンナくらいだ。

（……まさか、そんな筈は）

その疑惑を、一度は完全に打ち消した。恋愛感情などは欠片も持っていなかったが、仮にも妻に迎えようと思っていた女性である。



だが、彼女の実家は黒い噂があるのも事実なのだ。

彼がはつきりとジョアンナの名を口にした訳ではない。だが即座に彼女の顔を思い浮かべたということは、自分の中に僅かでも彼女を不審に思う所があったのだろうか。

「立ち振る舞いから察するに、ただの流れの剣士とは思えぬ。お前は、何者だ……？」

リリナを守らなければならない。そのときカインドールが考えたのは、妹のことだった。

もしジョアンナが絡んでいるのだとすれば、容易な相手ではない。彼女の父親は、前王に娘を側妃として差し出したこともある。不幸にも出産で、その娘も生まれてくる筈だった子供も亡くしたが、未だに大いなる実力と野心を持っている男だ。

妹に腕の立つ護衛をつけたい。だが、誰でも良い訳ではない。リリナが心を許し、信頼出来る誠実な男でなければ。

目の前にいるこの剣士は、腕は確かのようにだ。そして、あんな姿でリリナが安否を気遣う程、心を許している。身元さえきちんと明らかになれば適任に思えた。それには、彼がこの質問に隠し事をせず、誠実に答えることが必要だった。

### 【13】 護衛

「俺は」

その質問に、彼はほんの僅かな躊躇いも見せなかった。

「今はもう引退してこの町に住んでいますが、以前はある領主に仕えていました」

別の領主の側近。それはカインドールが想像した通りだった。隠すこともなく告げたことを思えば、案じたような思惑はないように思えた。

「どこの領主に？ この辺りか？」

だが、彼の返答はカインドールの予想以上のものだった。

「イグニティ領です」

「まさか、レニス様に？」

驚愕を隠そうともせず、カインドールは重ねて尋ねる。

数多くある領地の中でも最も大きく、そして王都に隣接しているイグニティ領は、代々王家の血筋の者が治めてきた土地だ。

現領主は、レニス・イグニティ・ロストラーガ。

カインドールよりも更に若い領主だが、彼の母は前王の妹であり、現王ジョルジュの従兄弟という血筋のれっきとした王族だ。それだけではない。彼の父は、海を隔てた隣国ロストラーガ王国の王子。

それに加え彼の妹ミルディアは去年、十八歳で王妃となった。つまり現王妃の兄でもあるのだ。

経済力も軍事力もこの国を遙かに上回るロストラーガ国の、唯一の王位継承者であった彼の父イデスは、友好国であるこの国に療養目的で滞在していたらしい。

ロストラーガはかなり北の方に位置している。その冬の寒さはこの国で育った者には想像出来ぬ程なのだと聞いた事があった。イデスは幼い頃から病がちだったらしく、気候の穏やかなこの国で療養しながら穏やかに暮らしていた。

けれどこの地に滞在するうちに王妹と恋に落ち、母国の猛反対を押し切って彼女と結婚する。

怒ったロストラーガ国王は息子の結婚を認めなかった。二人の結婚は両国の同盟すら危うくする程だったが、弱い身体とは裏腹に強い意志を持っていた彼は、自ら選んだ伴侶とこの国で暮らすことを選んだ。

だがロストラーガには他に王家の血を継ぐ者はいなかった。

何度も両国の間で話し合いが行われ、結局二人の間に男子が生まれれば、その子供を次期ロストラーガ国王にすることになったのだという。その後若くしてイデスは病没し、母である王妹も五年前に亡くなっている。

つまりレニスとは、イグニティ領主であると同時に次期ロストラーガ国王でもある人物なのだ。

去年には成人し、ロストラーガ王国の王太子となったレニスだったが、父に似てあまり丈夫な身体ではないらしく、この国でイグニティ領主として暮らしている。対面したことはないが、恐ろしく頭の切れる人物だと聞いていた。

「一年前まではイグニティ領にいました。まだ俺のことを覚えている者もいるかと」

「……」

レニスほどの者が側に置く人物ならば、腕も身元も確かに違いな。虚構とは思えなかったが、一応イグニティ領に確認の使者を手配しながら、カインドールは真剣に、彼をリリナの護衛することについて考えていた。

イグニティ領からの返信が届いたのは僅か三日後。

王都まで行くのに二日かかることを考えれば、こちらの書状を見るなり、早馬で返信を送ってくれたのだろう。しかも返信の書状には、レニスのサイン。彼自身がジルダンの身元を証明したということだった。

もう躊躇う理由は何もなかった。カインドールはリリナと、そし

て町へと帰っていたジルダーンを屋敷の私室へと呼ぶように命じる。女性の身支度には時間がかかる。

リリナが兄の部屋を訪れた時には、もうジルダーンが先にカインドールの部屋にいた。二人は何やら真剣な顔で話し合っている。

「あ……。ジルダーンさん？」

何故、彼が兄の部屋にいるのだろう。驚いたリリナだったが、その頬は恋しい人の優しい視線に見つめられて桜色に染まっていた。

「リリナ。これから彼には、お前の護衛について貰うことにした」  
恥じらうリリナの様子を見つめながら、カインドールはわざと事務的にそれを告げる。

「え……？」

その言葉に、彼が兄の部屋にいた時よりも驚いて、リリナは兄とジルダーンを交互に見つめた。

兄には、時々町に出てジルダーンと会っていたことは話していない。そしてジルダーンにも、自分が領主の妹なのだと告げてはいない。それなのに二人はもうすべてを知っているような様子であった。けれど兄もジルダーンも、リリナにとっては無条件で信頼出来る人達。だから、今は何も問いかけずに頷く。

「ジョアンナは、リリナのような年頃の女の子に男性の護衛を付けるなど無神経だ、などと言っていたが、大丈夫か？」

「もちろんです、お兄様」

彼がどんなに優しく、そして自分を大切に扱ってくれたのか。それはリリナ自身が一番良く知っている。ジョアンナは何故、そんなことを言ったのだろう。今までの関係から言って、リリナの身を案じてくれたとは考えにくい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8705p/>

---

花底の残夢

2011年2月17日21時40分発行